

# THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



## WEEKLY

# なごや ちくさ

題字 黒野清宇

名古屋千種ロータリークラブ  
 承認 1982年 8月24日  
 例会日 火曜日 12:30  
 例会場 愛知厚生年金会館  
 事務局 TEL763-5110 FAX763-5121  
 会長 笹野義春  
 幹事 佐久間良治  
 会報・雑誌委員長 舎人経昭

No.33

## 人類が私たちの仕事 MANKIND IS OUR BUSINESS

2001~2002年度 RI会長 リチャード D・キング

きょうの例会  
 第942回 平成14年 3月26日(火)

友愛の日

先週の記録  
 第941回 平成14年 3月19日(火) 晴

### ◆“それでこそロータリー”

### ◆出席報告

会員	70(62)名	出席	40名
出席率	64.52%		
前々回	3月5日(修正出席率)		98.39%

### ◆ゲスト紹介

愛知学院大学歯学部 教授 土屋 友幸氏

### 佐久間幹事報告

1. 次回例会終了後、理事役員会を開催致しますので理事役員の方はお残り下さい。

### ◆2002~2003年度地区委員の委嘱状伝達



会長より加藤重雄君にライラ委員の委嘱状が手渡されました。

### 笹野会長挨拶

皆さん、こんにちは。今日は愛知学院歯学部の土屋先生をお迎えして後程お話を伺います。

さて、近年では情報技術の発達により我国において携帯電話を所有している人口は6000万人を超え、さらにインターネットの利用者も2500万人に達するそうです。皆さんが毎日のように耳にする、情報技術(IT)の時代です。

ITの発達により私達の生活は便利になりましたが、情報が急速かつ膨大に交錯する状況を生み出すことにもなりました。これは単に個人レベルにとどまらず、国家間や巨大産業、経済パワーの相互の国際間でも同様で、ついには国際情報を盗聴分析し、管理かつ利用して他国や他の企業よりも優越的な地位に立とうとする「国際情報戦争」の時代に突入する結果となりました。日本もこの地球規模で展開される「国際情報戦争」に巻き込まれているばかりか、その重要な役割を果たし、また傍受される目標となっていますが、このことはあまり知られていないようです。

【エシュロン【起源は、第二次世界大戦中の英、米両国の戦争を優位に展開するための情報協力がその出発点で、これが順調に推移したことから同大戦終結後の1946年3月に「連合国と合衆国の安全に関する合意」国際協定が成立し、新たにカナダ、オーストラリア、ニュージーランドが加わり、5カ国が構成員となる全地球の通信傍受システム】

現在、ヨーロッパでは「エシュロン」と呼ばれるものが大きな問題となってきています。エシュロンの中心となるのはアメリカの国家安全保障局(NSA)であり、このNSAというのはアメリカ映画「エネミー・オブ・アメリカ」に登場する不気味な情報機関であるといえれば映画ファンならすぐ思い浮かべることができると思います。「エシュロン」の任務は通信衛星、海底ケーブルなどを経由して行われる電話、ファックス、電子メール、無線通信等をすべて真空掃除機のように一切を吸収してしまうことから始まり、傍受された通信は「辞書」と呼ばれるコンピューターに取り込むことです。そして収集された情報は情報分析の専門家によって精密かつ大規模に分析、総合され各方面の重要な意志決定に利用されることとなります。事実、この「エシュロン」が国際情報通信の盗聴を行い、その成果がアメリカの巨大企業の国際的な経済活動に利用されているという疑いが強まっており、そのために欧州議会の特別委員会が調査を進めた結果、昨年5月に「エシュロン並びにそれに類するシステムによる地球規模の傍受活動

が進行中である」との結論に達しました。

「エシュロン」の存在は、このような国際情報網が世界中にはりめぐらされているということ認識させ、国際社会においてアメリカの世界支配を容易かつ確固たるものにしていくといわれます。そしてアメリカは、その存在驚異だけで他国よりも有利な立場に立てることになるのです。けれどもアメリカ政府は一度も「エシュロン」の存在すら認めていません。「エシュロン」の基地は我国の青森県三沢の米軍基地内にもあり、ここに設置されている巨大アンテナがその一翼を担っているが、これは一般には知られていないそうです。そして、これにより我国のすべての通信も「エシュロン」の傍受の対象になっており、平和ボケの状態におかれている我国においては「国際情報戦争」についての認識がまだまだ希薄であります。情報の重要性がますます高まっている現在において、我国としても情報の盗聴をされないための防御手段の方策を講じるべき時期にきており、これらを認識することが我国が21世紀を生き延びるために一番大切なことではなかろうかと思えます。

◆講演

“小児歯科医が感じる子供の心の問題”

愛知学院大学歯学部 教授 土屋 友幸氏  
(紹介 黒須さん)



昭和36年に愛知学院大学歯学部が開設されてから40年、私が昭和46年(1971年)に本学歯学部小児歯科学講座に入局してから30年が経過しました。

開設当時は歯科大学が全国で8校しかなく、しかも小児歯科学講座は東京医科歯科大学と本学にしかない状況で小児患者は重症齲蝕に悩まされていました。そのため開学当初から小児患者が殺到し、いわゆる「小児患者の洪水時代」と呼ばれた時期で治療開始までの待機期間が3年半という異常事態が続きました。

その当時からすれば今の小児歯科の状況は夢のようであり、小児の口腔内の健康状態は齲蝕の減少や軽傷化が進み、治療から予防へと大きくシフトし小児の健康の維持・増進は確実に目的を達しつつあります。

しかしながら、身体の健康は健全化に向かっているのに対して、精神の健康は逆方向に向かっているのではないかと危惧されます。毎日のように報道される家庭内暴力や校内暴力、小児や青少年の凶悪犯罪、さらには両親などによる幼児虐待は現代社会の病的な状態を反映しています。

一小児歯科医として30年間子供たちと接してきて、また恩師故黒須一夫教授のもとで小児の歯科医療心理の研究に携わってきて、最近痛切に感じるのは小児の社会性の未熟さです。社会性とは社会の中で生活していくのに必要な様々な能力を獲得していくことであり、幼児の社会的行動は母親や近親者からの働きかけに対して情緒的反応を示すことから始まります。

人間は考える脳と感じる脳をもち、その二つの脳のバランスがとれた時に社会の秩序が保たれ個人としても安定した生活が保たれます。500万年かけて作られた現代人の脳は、生命を維持する脳幹部の周囲に情動(感情)を支配する大脳辺縁系といわれる部分が発生し、さらに何百万年かけて思考する脳が情動の脳の上に建て増された歴史を持っています。情動をつかさどる脳は思考する脳の生まれるはるか前から存在していたのです。子供たちが心豊かな人間生活を送ることができるように、大人たちは二種類の脳(感じる脳と考える脳)、二種類の知性(感じる知性と考える知性)を賢く操縦する方法を伝えなければなりません。

「21世紀は心の時代」との指摘もあり、少子化の進む中、心身ともに健康な子供たちを育てるために家族関係や家庭環境、地域社会の環境など人間形成の場の在り方を大人が社会が真剣に取り組む必要があると思います。

最後に、このような機会を与えて頂いた黒須委員長ならびに千種ロータリーの皆様に感謝申し上げます。

麻雀会成績

於：松楓閣 3/14(木)

RANK	NAME	MARK
優勝	佐久間良治	+ 58,300
2位	中山 信夫	+ 14,600
3位	小林 明	+ 5,500
B B	笹野 義春	△ 27,400

(参加者 8名)

ローターアクトクラブよりお知らせ

4月第一例会

日時 4月2日(火) 点鐘 18:30  
場所 名古屋ガーデンパレス  
テーマ ACT  
担当 国際奉仕委員会

4月第二例会

日時 4月16日(火) 登録 18:30  
場所 名古屋ガーデンパレス  
テーマ 感覚  
担当 専門知識開発委員会

◆ニコボックス(3/12・3/19)は紙面の都合上、次回掲載と致します。

◆次回例会(4月2日)

クラブフォーラム(ライラセミナー報告)